寛政四年肥前国島原山焼図

この絵図は、寛政四年（1792年）の雲仙普賢岳噴火の模様を描いたもので、松代藩ゆかりの真田宝物館に所蔵されていることが、最近判明した。

古記録によると、この噴火は、最初に山頂部の「普賢祠前の窪み（地獄跡火口）」から噴煙を上げ、そのほぼ50日後に、約１km離れた北北東山腹の「琵琶（びわ）の撥（ばち）」から溶岩を噴出し始めた。その後、その奥の「蜂の窪（くぼ）」からも噴火、溶岩は約50日にわたり「穴迫谷」を2.5km流れ下った。

溶岩噴出が止んだ頃から地震が激しくなり、１と月後には、隣接する「前山（眉山）」が大崩壊し、１万５千人の死者を出す大惨事となった。それだけに、他藩からも関心が寄せられ、この「島原大変」に関する絵図は数多く残されている。しかし、それらの多くは伝聞にもとづいているようで、あいまいさを感じさせる。

そのような中で、島原藩が作成した絵図には真実味がある。古記録によると、島原藩は幕府に６枚の絵図を提出していて、そのうち２枚は写しが現存し、藩庁作成らしいものがもう２枚ある（関原ほか、1986）。

ここに示す絵図は、当時の松代藩主真田伊豆守幸弘公の手沢品「寛政四年壬子春　肥前国島原山焼・山崩・高波絵図面四枚」のうちの２枚で、他の２枚は、島原藩が幕府に提出したものとほぼ同じである。ここに示す絵図の描写も、実際に観察しなければ描けない正確さと繊細さがあり、かつ、誇張がなく、記事も島原藩関係の古記録文とほぼ同じである。さらに、当時の島原藩主松平主殿頭忠恕公の室が幸弘公の妹で、その室との実子が、同年逝去した忠恕公の跡を継いで藩主となっていることからも両藩の関係は深く、この２枚の絵図の原図も島原藩が作成した可能性が高い。

図１は、一月十八日（２月10日）に噴煙活動を開始した山頂部にある普賢祠前の地獄跡火口の様子である。火口の縁に面した屏風岩を背に、祠が描かれているが、今回の噴火で1993年末に埋没するまで、同じ位置に安置されていた。

火口底から火口壁にかけて、赤い焔が描かれているが、実際は白い噴気であろう。最初は２か所に穴が開き、泥土を噴出している。この絵図には「古穴二ヶ所共泥にて埋」まり、直径１～３ｍの新しい穴が数か所描かれている。中には高温で硫黄が付着し「黄色」くなっている。この火口は、今回の噴火で成長した溶岩ドームで埋没し、姿を消してしまった。

この絵図の右下の「増補」と記された図は、山腹での噴火地点である。記されている距離に一部難点があるが、「焼岩（1663年噴出の古焼溶岩）より二丁（約200m）」、「穴そこ（穴迫？）上」であることから、「蜂の窪」と思われる。地割れがして、そこから噴煙を上げ、火気も見られたという。

図２は、「琵琶の撥」からの溶岩流（新焼溶岩）を描いたものである。これは安山岩～デイサイト質溶岩に特徴的な塊状溶岩流で、内部は流動性を保っているが、表層は冷えて塊状になり、押し合いへし合いしながら流れ下っている。そのため、溶岩塊に割れ目が入り、そこから、封じ込められていた高温のガスが、灰を混えながら吹き出している様子が、細かく描かれている。

夜見ると、表面は「薄墨」色だが、「岩中赤く誠に朱塗りのことき火」で「数十間上より」ころげ落ちると「火煙」になり、芝木に火がついたという。

この絵図の左下には、さらに細かく記されていて、溶岩塊にひびが入ると、「火を吹き」「花火を見るよう」であり、おそらく大量に崩れ落ちると「黒煙数十丈（百数十ｍ）吹き上」がったという。これらは、今回の噴火で見られたような、まさに崩落型火砕流の原始的形態であり、崩壊量が少なかったことと、谷の勾配が緩やかであったため、大事に至らなかったのであろう。

なお、絵図中の記事は、北原糸子氏に解読していただいた。

太田一也／九州大学名誉教授

図1

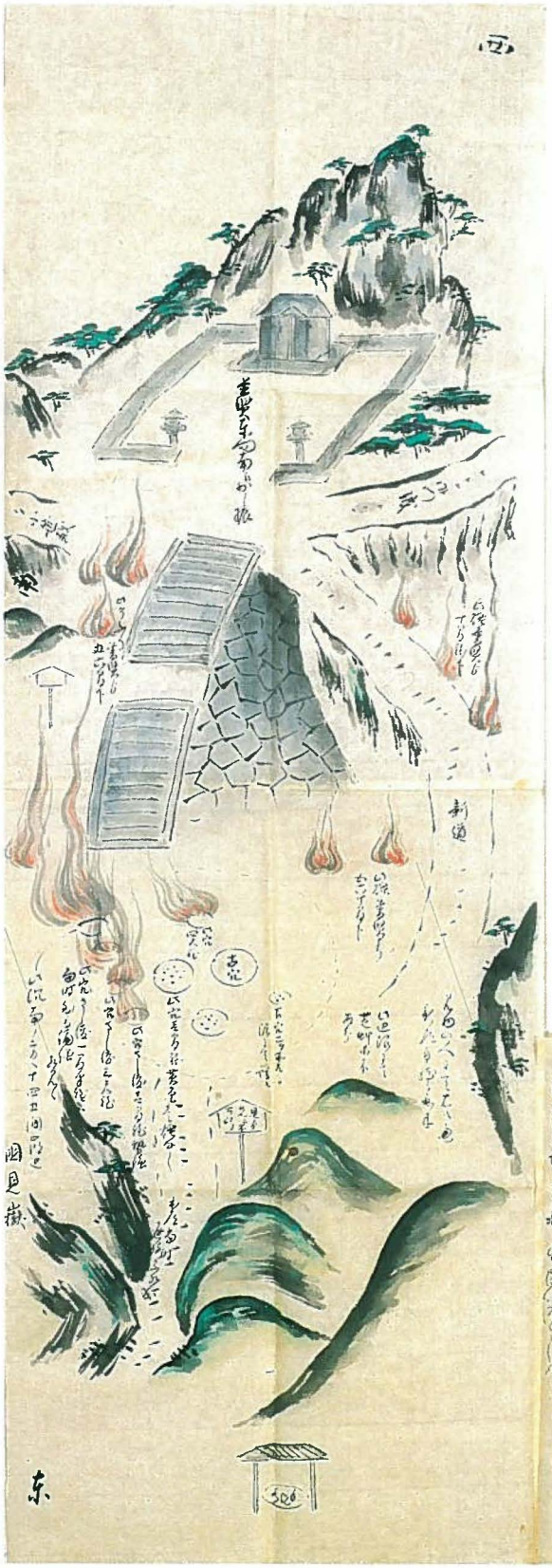

図2

寛政四年壬子春　肥前国島原山焼・山崩・高波絵図面四枚

松代藩文化施設管理事務所（真田宝物館）所蔵のうち２枚